



# 明治大学図書館

## 第12回書評コンテスト

### 受賞作品集



2022年度



## 目 次

第 12 回結果発表	3
講評（副館長 牧野淳司）	4
書評コンテスト受賞作品	7
受賞の言葉	16
表彰式の写真・奥付	19



# 第12回 書評コンテスト 結果発表

明治大学図書館書評コンテスト選考部会による  
厳正な選考の結果、下記の9作品の受賞が決定しました。

	所属・氏名	書評対象図書／著者名
最優秀賞	情報コミュニケーション学部 4年 須藤 佳織	風立ちぬ / 堀辰雄 著
優秀賞	文学部 2年 田邊 恭大	舟を編む / 三浦しをん 著
特別賞 (紀伊國屋書店賞)	文学部 3年 小野寺 優斗	悲しい曲の何が悲しいのか：音楽美学と心の哲学 / 源河 テ 著
特別賞 (三省堂書店賞)	経営学部 3年 中野 大輝	地球にちりばめられて / 多和田葉子 著
特別賞 (三省堂書店賞)	文学部 3年 飯山 陸	読んでいない本について堂々と語る方法 / ピエール・バイヤール 著
特別賞 (丸善雄松堂賞)	法学部 4年 角掛 ののか	これからの「正義」の話をしよう：いまを生き延びるための哲学 / マイケル・サンデル 著
佳作	文学部 3年 稲葉 豆花	おいしいごはんが食べられますように / 高瀬隼子 著
佳作	文学部 2年 大塚 周	ピダハン：「言語本能」を超える文化と世界観 / Daniel L. Everett 著
佳作	経営学部 3年 宮田 剛	無理ゲー社会 / 橋本 著

## 講 評

副館長 牧野淳司

受賞者のみなさん、おめでとうございます。選考部会委員を代表して、今回のコンテストの講評を述べさせていただきます。

今回、最優秀賞を獲得した方が書評対象としたのは堀辰雄の『風立ちぬ』でした。堀辰雄の小説の中でも傑作として評判が高いですし、何度も映画化されています。したがって、あらためて紹介する必要などないと思われるかもしれません。しかし、「読むたびに印象が変化する。これがこの小説の魅力なのだ」と改めて感じさせられた、「わかりやすく、素直に読んでみたい、読んだことがあるにしてもそのような気になった」との評価がありました。自身の読書体験に加えて、小説の内容とその背景、そして魅力が簡潔に述べられている書評でした。

今回、審査を担当して、一つ重要だと感じたことは、名作と呼ばれる小説を取り上げる時には、今、なぜそれを読むのか、を説明することです。通常、出版されて数十年が経過しているような本は、書評で取り上げられることは、あまりありません。新聞や雑誌の書評欄では、新刊書が紹介されることが多いです。もちろん、新聞や雑誌の書評と、大学図書館が主催する書評コンテストとでは性質が異なりますが、みなに興味・関心を持ってもらえそうな本や、今こそ読むべきだと思われる本を取り上げようとするのは同じです。その場合、書評対象は、比較的新しいものから探す方が楽です。ということは、逆に言えば、名作と呼ばれるような本を対象にすると、少しハードルが高くなるということです。何だこの本なら紹介されなくても知っていると思われてしまうかもしれないし、何を今さらと言われてしまうかもしれません。ですので、なぜ今この本なのかということが、はっきり伝わるようにすることが大事だと思いました。そのためには、私たちが生きる時代をよく見つめることが必要です。そして古いものを今もう一度読む意義、それを見つけ出す能力を育てなければなりません。

そのことに関係しますが、選考委員のコメントに、「どんな本を対象にしてもいいとなると、選書のセンスが問われるのは当然」というのがありました。よい本を選ぶことができる時点で、一步リードです。よい本を自分の力で選ぶことができる、そのための経験を大事にしたいです。

上のように考えた後で、他の書評対象本の出版年がちょっと気になったので、ざっと調べてみました。今回、24編の応募があったのですが、年代別によると、2020年代の本は6冊、

2010年代の本は9冊でした。ここまでで15冊です。新しいのがやはり多いです。続けて2000年代は5冊です。以上、2000年以降の本で合計20冊になります。残りの4冊がそれ以前の本ということになります。新刊書が特別に多いということはないですが、やはり古い本は少ないようです。

ちなみに、今週月曜日（2023年1月30日）の読書新聞朝刊に、全国大学ビブリオバトルの記事が出ていました。全国の大学生がお薦め本を語る、そのプレゼンテーションを競うものですが、地区予選を勝ち抜いた全国の大学生25人が昨年末に千葉に集まり、全国大会が行われたそうです。どんな本を紹介したかリストが載っていたので、出版年を調べてみたのですが、25冊中17冊が2010年以降の本で、2000年より前の本は2冊でした。ビブリオバトルは書評とはまた性格が違いますが、取り上げる本の年代の傾向はあまり変わらないようです。ちなみに、2000年より前の本の1つは、アルベール・カミュの『ペスト』で、こちらはなぜ今なのか、だいたい予想がつかますが、もう一つはイタロ・カルヴィーノというイタリアの文学者・批評家の本でした。受賞したわけではないようですが、どうしてこの本なのか、大学教員としては、ちょっと興味を持ちました。

それで、もし来年も挑戦するという人がいたら、ちょっとした戦略ですが、明治大学図書館の書評コンテストの場合、選考委員に何人かの大学教員が含まれます。大学教員は、新しい本にも関心を持っていますが、もしかすると古い本の価値を再発見する仕事を高く評価する人もいるかもしれません。そうすると、どうしたらよいか。新しい本を積極的に読みつつ、一見、古びている本でもそのよさを発見できないか、たまに挑戦してみるということを日頃から試みてよいかもかもしれません。

それは受賞を狙うためだけではありません。新刊本・近刊本は、今は面白いかもしれませんが、数年後には色あせてしまうものも多いでしょう。古い本、あるいは出版から十数年経過した本で、その面白さを発見できたら、それはこの先もある程度、命を持った本になる可能性が高いのです。そのような本に出会えると、きっと自分の人生にとって、とてもよいことだと思います。ですので、新刊本だけでなく、ちょっと昔の本に挑戦してみることも、よいことではないでしょうか。

出版年のことばかり話してしまいましたが、やはり重要なことは、その本を読みたくなるか否かですね。今回、受賞した書評について、選考委員のコメントを見てみると、「読みたいと思わせる書き方だった」「興味・関心が湧いた」というのが多いです。やはり、書評を読んで、その本を読みたくなるかどうか重要です。加えて、当然のことですが、本の内容を的確に把握しているか否かも評価基準の一つになっていました。ついでに、ちょっと惜しまれる点の指摘で複数あったのは、紹介しすぎ（ネタばれ）であるということと、著者の主張をストレートに書いてしまっているということです。世阿弥の「秘すれば花」ではないのですが、隠しておいたほうが、つまり、出し惜しみをしたほうが、人を惹きつけることは

事実です。これは、書評に限らないことですが、ちゃんと理解しておくべきことですね。

全体的な評価としては、構成・リズムが優れたものが多かったが、視点の独自性や引き込む力がやや弱いという意見がありました。ただし、学生の「書きたい」という思いは伝わってきて、それは時に未成熟な書き方になるが、好感が持てるという評価に繋がってもしました。そうすると、文章の技術を磨くことも必要ですが、やはり何と云っても、書物に真摯に向き合う姿勢が大事です。それは年をとっても大事にしたいところです。

講評は以上ですが、最後に、今回、面白い書評をいくつか読むことができたことに感謝します。そして、みなさんが、これからも本と図書館を大切にしながら生活してくれると、とても嬉しいことです。



# 最優秀賞

『風立ちぬ』 堀 辰雄著

情報コミュニケーション学部 情報コミュニケーション学科4年

須藤 佳織

読むたびに印象が変化する小説である。私は幼い頃を含め3度読みそのように感じた。最初は姉の勧めで手にとった。まだ小学生だったため細部まで理解できなかったが、病に苦しむ節子が山巒の影に父の姿を重ね思いを馳せる場面は印象に残った。そして半年ほど前、東京で開催されていた「鈴木敏夫とジブリ」展を訪れたことをきっかけに再読した。その時は愛する人が着実に死へ向かうことへ不安を抱きながら、彼女と共に過ごす東の間の幸せを追体験することができた。そして、この書評のために読んで3度目はセリフや風景の描写の中に隠された生への希望を感じることができた。

これは結核に侵された婚約者の節子に連れ添い、高原のサナトリウムで過ごす主人公の日常を描いた小説である。節子の病状は徐々に、しかし確実に悪化していく。そのような中でも、窓から見える景色や散歩に出かけた時の自然を細部に至るまで描写し、そこに主人公や節子の心情が素直に吐露されている。

この小説は作者自身の実体験をもとにしており、それを知ることにより深く読むことができる。節子のモデルとなった矢野綾子は、堀辰雄の婚約者であった。そして彼らはともに肺結核を患っていた。婚約した翌年から二人の病状は悪化し、富士見の高原療養所に滞在することになった。堀辰雄は回復に向かったが、綾子は治療のいかなくこの世を去った。この体験をもとに『風立ちぬ』という作品が書かれた。

この小説の魅力は次の二つにある。第一に抒情性豊かな言葉遣いである。特に登場人物の表情と風景描写が丁寧で、主人公二人の心の機微が行間から伝わってくる。例えば、安静を命じられ似たような日々を過ごす場面で「こんなささやかなものだけで私たちがこれほどまでに満足していただけるのは、ただ私がそれをこの女と共にしているからなのだ、ということを私は確信していられた。」という一文がある。いかに彼が節子を愛しているのかが、繊細でストレートな言葉遣いから伝わってくる。また記された日付から、季節感や時間の流れが伝わってくる。登場人物たちと同じような感覚が読む者の心の隅々まで染み渡るのである。第二に、現在私たちが直面している新型コロナウイルスが蔓延した世界観に通じるものがある。私自身も感染してしまい、高熱を出し自宅で隔離されている間、窓から流れる雲や外の景色を見て心を落ち着かせた。そのような体験をサナトリウムの室内で過ごす二人と重ね合わせて読むと、この小説が現代に生き生きと蘇ってくるように思える。私たちは現在、感染症のために外出も自由にできず、感染して床に伏せることもある。この小説の主人公たちと同じようにさまざまな思いを抱きながら外の風景を眺める人もいることだろう。だからこそ、今の時代を生きる私たちの心に響くのだと思う。「ウィズ・コロナ」の時代を生きる今こそ多くの人に読んでほしい作品である。

# 優秀賞

『舟を編む』 三浦しをん著

文学部 文学科2年

田邊 恭大

夜の海のような藍色を背景に、月のごとき銀色が控えめに飾られたハードカバー。パツとしない見目の本だと思われるかもしれない。しかし読み終わる頃には、この地味な装丁こそ愛おしく感じられる。

本書は神保町のとある出版社を舞台に、新たな辞書「大渡海」をつくるべく奮闘する者たちの歩みを描いている。しかし辞書づくりにかかる資金と時間は測り知れず、彼らは幾度となく困難に直面する。はたして「大渡海」は無事に刊行されるのか。

辞書編集部の面々が正確な語義を捉えようと情熱を注ぐ姿には、胸を打たれるものがある。言葉を正しい意味で拾い上げる作業は一筋縄ではいかない。「どれだけ完璧を期しても、言葉は生き物のように流動する。」という一文からも、その難しさが読み取れる。それだけに、一冊に込める彼らの努力が輝かしく映る。

辞書の編纂は出版業界でも地味な仕事だ。景気に左右されにくい反面、爆発的なヒットも見込めない。それでも全員が「大渡海」に万全を期そうとするのは、ただ単に仕事への責任感によるものだろうか。きっとそうではなく、知らず知らずのうちに仲間の情熱に触発されたのだと思わずにいられない。誰かの情熱に、情熱で応える素晴らしさを本書は教えてくれる。

本書の全体を象徴する一節がある。「ひとは辞書という舟に乗り、暗い海面に浮かびあがる小さな光を集める。もっともふさわしい言葉で、正確に、思いをだれかに届けるために。」これを体現するかのよう、登場人物の関係は言葉によって紡がれていく。実は、本書には明確な主人公が存在しない。章ごとに視点が切り替わり、各々の人柄やエピソードが順に描かれていく。彼らは笑い、泣き、恋をする。皆、言葉があるから冗談で笑い合っ、感情を吐露して泣いて、相手に好意を伝えることができる。普段私たちが気にも留めない、ごく当たり前のことだが、本書ではそこに人間としての幸せを見出せる。地味に思えても、平凡な日常にこそ感動できる美しさがあるのだと気づかせてくれる。

パツとしないことにも価値がある。きっと本書を読み終わる頃には、辞書に対する見方も、地味だと思っていたものへの印象も大きく変わっていることだろう。

# 特別賞 紀伊國屋書店賞

『悲しい曲の何が悲しいのか：音楽美学と心の哲学』源河 亨著

文学部 史学地理学科 3年

小野寺 優斗

音楽を肌身離さず持ち歩く時代になって久しい。我々の生活は、もはや音楽と切り離せなくなっている。しばしば、音楽を聴くときには何かしらの感情が伴う。例えば、何かに失敗して落ち込んでいるとき、元気の出る「明るい曲」を聴く場面を思い浮かべよう。傷ついた心は「明るい曲」に慰められるが、果たして「明るい曲」の何が「明るい」のであろうか。また、「悲しい曲」の何が「悲しい」のであろうか。本書はごく日常的な経験に取って疑問を投げかける。

筆者の源河亨氏は心にまつわる哲学を専門とする研究者であるが、本書では心の哲学と音楽の関連を様々な角度から考察する。まず、音楽を聴く経験そのものを「聴取経験」と定義したうえで、その中でも歌詞の内容に影響されない「音の配列としての音楽」を分析の対象とする。そして、「この曲は悲しい」といった美的な判断は、誰もが同意するであろう「ナイアガラの滝の音はダイナミックだ」という美的な判断と同様に、客観性を持つものであるという。このことを踏まえて、「悲しい曲の何が悲しいのか」という問いかけに対しては、対立するかのように思われる有力な仮説を比較したうえで、それらの関係性にまつわる新たな見解を示す。本書における主張の一部を挙げたが、重要かつ興味深いのは結論ではなく、そこに至るまでの過程である。具体的な道筋に関しては本書をご覧ください。

「そもそも、〇〇な曲(美しい・悲しいなど)は人それぞれではないだろうか?」、我々は疑問を抱くだろう。「蓼食う虫も好き好き」ということわざが象徴するように、私が美しいと感じるモノとあなたが美しいと感じるモノは個人の好みによって異なるのではないかと。筆者は身近な具体例を用いて様々な疑問を払拭するが、ここでは1mの段差を飛び越える子供と大人が引き合いとなる。身長差から、両者では抱く恐怖の度合いが異なると予想できるが、このことは必ずしも全ての感情が人それぞれではないことを示唆すると筆者は主張する。このような反論と再反論が織り成すのは、ある種の哲学的対話にほかならない。たしかに、古くから哲学的営みは対話と結びつけられてきた。本書の大きな魅力として、読者の抱きやすい疑問が複数掲載され、筆者が一度擁護したうえで再反論が加えられるという、読者と筆者による対話形式の構成が取られる点が挙げられる。このように本書は、「音の配列としての音楽」を身近な具体例と平易な言葉を用いて考察するため、事前知識に乏しくても対話に参加できるような工夫が施されている。

哲学の専門書でありながら敷居の低い良書と言えるが、哲学的対話が完結しているわけではない。段差の具体例で「蓼食う虫も好き好きは一部誤り」と証明する際、唐突に身体的な条件を持ち出して反証するのは、どれほど整合性が取れているのだろうか。このような疑問から、私の哲学的対話をはじめたい。

# 特別賞 三省堂書店賞

『地球にちりばめられて』 多和田葉子著

経営学部 経営学科3年

中野 大輝

この本の著者である多和田葉子はドイツを拠点に活動し、日本だけでなく海外でも大きな文学賞を受賞していることから「越境する作家」とも呼ばれ、ノーベル文学賞に近い作家の一人に数えられている。彼女の寓意性あふれる読みやすい文体で綴られた小説には、たびたび「ある共同体における異質な存在」が登場するようだ。

『地球にちりばめられて』では、故郷の島国が消滅し、北欧で暮らしていくうちに北欧の三言語に対応した独自の「手作り言語」である「パンスカ（汎スカンジナビア）」を話すようになった主人公 Hiruko が言語的に異質な存在として現れる。パンスカを話す彼女はどこにも属さないが、それゆえに型にはまらない自由な存在として描かれている。物語は Hiruko の同郷人探しを中心に、デンマークで言語学を学ぶ大学院生のクヌート、女性として生きるインドからの留学生アカッシュ、グリーンランド出身ながら鯨の国の住人を演じるナヌークと彼に想いを寄せるノラ、そして同郷人と思わしき Susanoo の6人の語りから構成される。生まれも言語もバラバラな彼らが、いがみ合うことなく友情を育み、ときに目的を逸れて恋路にも進んでいきながらも、最終的に Susanoo のもとにたどり着くという工程と展開には堅苦しさが一切なく、読者も一緒に旅をしているような気分になる。

物語の中で Hiruko がパンスカを話しているときやナヌークが鯨の国の住人を演じて日本語を話しているとき、2人は生い立ちという柵から解放されて生き生きとしているように見える。他者の言語というのは新しい自己を実現するツールでもあるのだ。アカッシュの性の「引っ越し」もそうだが、生まれや性別に囚われることなく、自由に生きることの大切さをこの作品は教えてくれる。

多和田葉子は 2003 年に出版されたエッセイ、『エクソフォニー』の中でヨーロッパ中心主義と日本のねじれた国粋主義の問題を指摘していたが、本作では「日本」そのものを消滅させ「鯨はフィンランド料理」、「抹茶は Macho からきている」と本気で思っているクヌートを登場させることで、日本とアジアを区別するような国粋主義が諷刺されてように感じた。

境界線は越えるためにある。他の文化、言語といったものを否定し区別するのではなく、それぞれを交流させ、かけ合わせることで新しい文学の可能性を追求する。地球にちりばめられた文化と触れ合いながら活動してきた多和田葉子だからこそ描ける物語がある。故郷が消滅し、その地の言語だけでなく文化すらも忘れ去られた Hiruko は決して孤独ではない。彼女の前向きな姿勢と個性豊かな登場人物たちが紡いでいく肯定の物語はきっと読者の心を温かく包み込むだろう。

# 特別賞 三省堂書店賞

## 『読んでいない本について堂々と語る方法』

ピエール・バイヤール著、大浦康介訳

文学部 文学科3年

飯山 陸

「本は最初から最後まで全て読んで、きちんと内容を理解しないとイケない」。これまでの学校教育や、自分の読書経験の中で、いつの間にか芽生えていた「ルール」だ。そしておそらく、自分を含め、多くの人を縛り付けている厳しいルールである。

自分の部屋にある積読を見ていると、「読まなければ」と当然思う。しかし、その途端、あのルールが襲い掛かる。本を開けば、最初から最後まできちんと読み、内容を理解しなければならない責任があるように感じ、本を開くのを躊躇う。好きだった読書が、いつの間にか呪縛となっていた。

そんな私を解放してくれたのが本書である。本書は糸くずをほどくかのように、丁寧に読書についての固定観念を解いてくれる。私たちが本について語る際、必ずその対象の本を最初から最後まで読み、内容を完璧に理解しているだろうか。そうではない。流し読みをしたり、入門書や解説書、更には「書評」も含め、あらゆる言説を活用して本を読んでいる筈だ。ここで「読んでいる本そのもの」と「読者の頭の中にある本」は同一ではないことがわかる。私たちがあくまで本を恣意的に読んでいるのだ。どんなに熟読していたとしても、私たちが本そのものの内容を完璧に理解しているわけではないのである。

こうして私たちは、恣意的に読んだ本の集合、本書に言わせれば「内なる図書館」を各自持っている。私たちが本について語る際は、この「内なる図書館」を使う。そして、ほとんどの場合、ある本について語る際は、その本単体だけではなく、他の本を含めた広い範囲のまとまりの中で語られる。本書はそのまとまりを「共有図書館」と呼んでいる。この「共有図書館」こそ、主観的であるが、教養の実体なのだ。

しかし、主観的な「共有図書館」は貧しすぎるのではないだろうか。それは豊かな教養と言えるのだろうか？本書はこう答える。「内なる図書館」をもつ読書人が具体的書物について語り合うことで、「共有図書館」のイメージを豊かにしていくのだと。私たちが本についての対話を通して、自分が知らなかったことや、見逃していたことに気づかされる。そうして「共有図書館」は豊かになっていくのだ。ゼミや読書会、そしてこの「書評」も、本について語りあう場である。語ることで、終わらない「読書」という道を、一步一步進んでいくのだ。

本書は「本は最初から最後まで全て読んで、きちんと内容を理解しないとイケない」という呪縛から解放させてくれるだけではない。同時に、本について他者と対話する、教養のあるべき姿へと私たちを動かしてくれる。私たちはパンデミックの最中で、マスクをし、口を閉じてしまった。しかし、口を開こう。そして、他者と語るのだ。そうして私たちは読書人の道を進んでいく。

# 特別賞 丸善雄松堂賞

『これからの「正義」の話をしよう いまを生き延びるための哲学』

マイケル・サンデル著、鬼澤忍訳

法学部 法律学科4年 角掛 ののか

「中立」は魅力的な言葉だ。中立的な社会。多様な生き方が尊重されるために、器である社会は、そこに入れる人を選び好みしてはならない。中立は正義なのだ。

「補助金貰って政権批判するな」。コロナ禍で、日本でも政治的発言をするアーティストが目立った。印象的だったのは、ステージ上で政権批判をしたアーティスト達に対する、冷たい意見の数々である。それらは政府が補助金を出したイベントだったからだ。

考えてみれば不思議な話だ。「中立」な政府の仕事は、皆が自分らしく生きるための土台作りである。コロナによる困難を補助金で埋めるのは、単なる政府の役割だ。ならば、出演者も自分らしく表現活動をしただけではないか。社会に中立を求める私たちの必死な正義感は、いつしか私たち自身の小さな営みをも叩き始めているのだろうか。

本作はアメリカ社会に着目し、現代政治を動かす正義について掘り下げる。原題『JUSTICE:What's the Right Thing to Do?』の通り、多元的社会に生きる私たちが「正しく行動する」とはどういうことを問う。著者のサンデルはハーヴァード大教授で、専門は政治哲学だ。本作も彼の講義から誕生しており、アフーマティブ・アクションや同性婚など様々な問題を提示しては常識を揺さぶり、「あなたはどうか考えるか」を投げかける。

興味深いのは、本作の構成が「旅」の形をとる点だ。だが地理的な旅ではない。考察の旅だ。まず私たちは、過去の哲学者たちの思想を辿る。そこには、正義に関する3つのアプローチがある。福祉の最大化、自由の尊重、美德の涵養だ。例えば、福祉の最大化を求める人は、1人のテロ容疑者を拷問して数十万人の命が助かるのなら、拷問せよと言う。一方でこの人は、路上にいる1人の物乞いを見るせいで大勢の人が不快になるのなら、物乞いを隔離施設に閉じ込めるべきとも言う。あなたはどうか考えるか。

悩みながら旅を進める。ようやくサンデル自身の具体的な主張が出てくる。私は残りの紙面の薄さを確認し、旅の目的地に至ることを悟る。サンデルは、むやみに中立性を装えば、かえって偏狭で不寛容な市民社会になると言う。実際の正義には、生まれ育った国や地域・そこでの立ち位置など、その共同体ゆえの道徳的・宗教的価値観が強く結びついている。歴史でも婚姻でも、そこをタブー視せず議論すべきと主張するのだ。

この考えに、2020年代を生きるあなたは首を傾げるかもしれない。原著の日本語版が発売され、サンデルブームが起きたのは2010年だ。思えば、翌年の東日本大震災で言われた「絆」は、日本という共同体が何かしらの精神を共有している前提があるかのような言葉だった。

いまコロナ禍が炙り出したのは、切実な生活で、各々が持つ限界ラインの違いだ。震災から、サンデルブームから約10年。アメリカの話ではあるが、本作と今の日本の距離を測れば、私たちの多様性や平等が、どこから来て、どこへ向かうべきか、見定める助けになるだろう。

# 佳 作

『おいしいごはんが食べられますように』高瀬隼子著

文学部 文学科3年

稲葉 夏花

いただきます。一日三回、両手を合わせてこの言葉を発し、食事をする。米、肉、野菜。あるいは作り手。多様なかたちで食べ物に宿った命を頂戴するという意味をもつ挨拶だ。評者は特段疑問を持つこともなく、毎日「おいしくいただいている」のだが、日本特有のこの文化が足枷となることがある。

食事という行為を嫌う会社員の二谷は、同僚である芦川に好意を抱く。彼女は仕事を早退、欠勤することが多いが、守ってあげたくなるようないじらしさを備えている。そんな芦川は、度々職場に手作りスイーツを持ってくる。普段お世話になっているお礼という名目で配られるそれらを、少なくとも表面上は美味しそうに平らげる社員たち。二谷もその場で喜びを言葉にすることはしても、肯定的に味わうことはない。芦川と交際を始めた後も、自分のために振る舞われる彼女の手料理を、素直に受け入れられずにいる。この気質は単純に潔癖とも形容できるだろうが、こびり付いた他人の命が、彼には何より重いのだ。同じく会社の同僚である押尾も、芦川の恩の押し付けが気に入らない。そんな押尾は二谷を巻き込み芦川に嫌がらせをするようになるが、上司がその実態に気付いたことを機に退職する。この一連の展開を読むと、差し出された命は全てありがたくいただくということが、正しいと言われているような気分になる。芦川としては、「みんなにおいしいごはんを食べてもらいたい」という気持ちを表現しているだけで他意はない。その悪気のなさが、尚更厄介な思いにさせてくるのだろう。

二谷にとって、食という行為はそれ自体が苦痛を伴う存在で、「ごちそうさま」と言いたくなる瞬間は皆無だ。食欲を満たすという目的達成のためだけに、彼は食と関わっていたいのである。しかし、日常生活に浸透しきっているのは、礼儀としての食、親睦のための食。それを引き起こしている張本人である芦川から、結局二谷は離れることができない。文化により生まれる嫌悪を避けることよりも、本能に従うことを選択している。本能のために文化を妥協して許容する様相からは、人間が他人との交流の中に生きる動物であることが表現されていると感ぜられる。食に託された命がもたらす人間のほの暗さを読む物語として、丁寧に噛みしめる。

# 佳 作

## 『ピダハン「言語本能」を超える文化と世界観』 Daniel L.Everett 著

文学部 文学科2年 大塚 周

ブラジル、アマゾンに住む少数民族ピダハン。著者は宣教師として彼らの下へ聖書のピダハン語訳作成のため、また、1人の言語学者としてフィールドワークに訪れる。

ピダハン語は現存するどの言語とも孤立したものである。まず、数を表す言葉がなく、物を数えたり、計算を行なったりしない。さらに、色を表す言葉も存在しない。他にも英語で比較級や完了形にあたる表現も存在しない。

言語のみならず、彼らの文化は我々とは非常に異なっている。簡素な家に住み、食品を交換目的以外で保存することはない。道具類をほとんど作らず、物々交換で手に入れた大切な道具をいともぞんざいに扱う。芸術作品もほぼ皆無、他の民族に見られるようなペイントや装飾なども存在しない。

このようなピダハンの物質文化の根底には、未来を気にせずに、その日その日を充実させるという考え方が存在する。

もう一つ、ピダハン文化の特徴として、彼らは体験の直接性に重きを置く。彼らは実際に目撃されたか、直接の目撃者から聞いたことしか信じない。それゆえにピダハンには儀式や口頭伝承が存在しない。なので著者がどれほどイエスの話をしたところで「なぜ見たこともない男の言葉を信じるんだ？」と一蹴されてしまう。そうして最終的に、著者は伝導を目的としたのにも関わらず、自らの信仰に疑問を抱いてしまう。

SNS が広く普及し情報過多となった現代ではミニマリストという言葉をよく耳にする。彼らは自分の周りから不要なものを捨て必要なものだけを残すというライフスタイルを実践する人々のことである。自らの経験による情報しか信じず、その日を凌ぐ以上の食料は残さないというピダハンはまさに究極のミニマリストと言える。

そんなピダハンは精神的にとっても健康である。これから先に起こる未来を気に病んだりしないからだ。ピダハンの村に来たMITの研究グループはピダハンがこれまで出会った中で最も幸せそうな民族であると評している。

ただ、ここで日本もピダハンのような純化された文化を真似しようなどと考えるはいけない。本書で何度も話題に出た文化と言語の関係性のように、文化はそこで暮らす人間の思考や知覚に大きな影響を与える。アメリカ人の著者はピダハン文化に馴染むことに苦戦していたし、逆も然りピダハンも欧米文化に適応することは不可能であろう。ピダハンの文化を模倣するようなことは決してしないし、できない。ピダハンの生き方では競争社会を生き抜くために必要な創造性と個性が停滞してしまい、文化は進化を止めてしまうからだ。しかし、彼らの場合はそれで良いのだ。なぜなら現状の人生に満足していて変化を望まず、自分達の文化を誇りに思っているからである。つまり、ピダハンの生き方はピダハンにしかできない。そこには優劣などの二元的価値観を超えた、希少性や、文化の独自性などの観点からこの消滅危機言語を守っていく道理が存在するのではないかと考える。

# 佳作

## 『無理ゲー社会』 橘 玲著

経営学部 経営学科3年 宮田 剛

「苦しまずに自殺する権利」が与えられたら、行使するだろうか。

最近、社会的になにも失うものがない人、所謂「無敵の人」による凶行事件が多い。彼らは、現代の格差社会において社会的に見捨てられ、社会に絶望し、自分の存在を世間に証明するために凶行に走るのではないか。もちろん、そんな理由で人を傷つけることが許されるわけがない。しかし、「無敵の人」が生まれてしまうほど、現代社会が理不尽な格差社会であることも無視できない。人々は格差社会のなかで、社会的・経済的に成功し、評価と性愛を獲得しなければいけないという「無理ゲー」に強制的に参加させられている。

映画「君の名は。」「天気の子」、芥川賞受賞作品の「ブラックボックス」にも見られるように、「自分らしく生きる」ということが求められる風潮にある。なぜなら、世界の超リベラル化が進んでいるからだ。

リベラルな社会では個人主義が強まるため、中間共同体が解体され、自己責任が強調されるようになり、成功も失敗もすべて自分のせいになる。つまり、そこには「メリトクラシー」の考え方が根底にある。

メリトクラシーは、知能+努力=能力であること定義したものだ。しかし、遺伝決定論によれば、知能における遺伝的要素の占める割合は大きく、現実には、生まれたときから不公正な知能格差が存在する。しかし、リベラルな社会では、そうした不公正なものは無視され、努力すれば成功することができるという偽りの公正さが社会には蔓延している。つまり、格差社会の底辺にいる人達が成功できない理由は、当人の努力不足に転嫁される。

きらびやかな能力主義の世界は、生活の方途を失いかけていたり、性愛格差の底辺で愛情空間から排除されてしまった人を抱えており、個人の夢が氾濫するこの日本では、将来に絶望し、安楽死を求める人が増えている。自分らしく生きる能力を持たない人には、残酷な世の中なのだ。

著者は、「無理ゲー社会」の課題についても指摘している。経済格差に関しては、貨幣は分配できるものであるため、いつか解決されるものだとしている。経済格差に関する施策の議論が活発に行われているのも事実だ。問題は、評価の格差だ。評価は分配することが困難なため、性愛空間の占める割合が大きい現代社会にとって、評判格差は深刻であり、解決不可能なものだ。

私がこの本を手にとったのは、そうした現代の社会の状況をどこか感じとっていたからかもしれない。社会が発展し、リベラル化が進んだ先進国ほど、途上国に比べて自殺者が多いことを見れば、リベラル化社会が「無理ゲー社会」であるという著者の主張が正しいこともわかる。現代社会の問題は、あまりに複雑ですぐに解決策を提示することは難しい。しかし、本書は、私たちが参加させられている「無理ゲー」のゲームシステムを修正する方法を、考案しなければいけないということを私たちに教えてくれる。



## 受賞の言葉

### 最優秀賞

情報コミュニケーション学部4年 須藤 佳織

叙情性豊かな言葉遣いにより登場人物の感情が細やかに伝わってくる表現に魅力を感じこの作品を選びました。また、現在直面している新型コロナウイルスが蔓延した世界観に通ずるものがあり、今だから心に響く作品なので皆様におすすめしたいという思いで書評を書きました。

### 優秀賞

文学部2年 田邊 恭太

私は言葉が持つ力を信じています。言葉さえあれば人の心を動かし、世界をも変えてしまえると思うのです。私はいつか、そんな言葉の力を引き出す文章が書けるようになりたい。今回の書評はその出発点です。もし、私の書評で「この本を読んでみたい」と心に小さな変化をもたらすことができたなら、光栄に思います。

### 特別賞（紀伊國屋書店賞）

文学部3年 小野寺 優斗

今回の受賞作品のジャンルを見ると小説が主であり、学術書を書評対象としたケースは珍しいかもしれません。私が取り上げた『悲しい曲の何が悲しいのか』は、誰もが抱く感情をテーマとしています。小説を読むことで味わえる感動やスリルはないかもしれませんが、身近で具体的なテーマを哲学者はどのように考えるのか？小説では味わえないその道筋を追うことができる良書だと思います。





**特別賞（三省堂書店賞）**

**経営学部3年 中野 大輝**

いかにその本の魅力を相手に伝えるのか。内容を正しく理解するだけでなく、さらに読みたいと思わせるような文章を作らなければいけない。今回、書評を通して、より一層、本と向き合うきっかけになったように思います。素晴らしい機会をいただきありがとうございました。

**特別賞（三省堂書店賞）**

**文学部3年 飯山 陸**

この度は特別賞を受賞し、誠に嬉しく思います。今回、『読んでいない本について堂々と語る方法』というインパクトの強い本の書評を書いたのは、「本は完璧に読めなくても良い」ということを伝えたかったためです。本を読み、人と語ることで、あるべき「知」の姿が見えてくる。それが本来あるべき読書の姿だと私は思います。

**特別賞（丸善雄松堂賞）**

**法学部4年 角掛 ののか**

大学は答えのない問いを考えると、と高校で言われた。へえそうなんだ、としか思わなかった。大学生になり、これはもっと切実な話なのだと気づいた。社会に出れば、人生や生活のギリギリさに気を取られ、抽象的で大きな理念を考える余裕は少なくなる。今だからこそゆっくり純粹に向き合える本を選んだ。





### 佳 作

#### 文学部3年 稲葉 夏花

昨年度に続いて選出していただき、嬉しく思います。作品の面白いところを紹介することで、本の良さをより多くの人に広めるきっかけになり得るところが書評の魅力だと感じています。日々の読書体験を豊かなものにするために、今後も取り組んでいきたいです。

### 佳 作

#### 文学部2年 大塚 周

書評という行為を通すことで難しい内容の本も理解できるということが1番大切なことだと思います。今回こうしてなにかしらの賞を貰えたことはとても嬉しいのですが、来年はもっと良いものが書けるように努力したいと思います。

### 佳 作

#### 経営学部3年 宮田 剛

この度はこのような機会をいただきありがとうございます。書評コンテストを通じまして、今まで触れたことのなかった「書評」というものを書く面白さを知ることが出来ました。また、書評において、なぜ今この本を読むのかという意義づけの重要さに気づかされました。デジタル化が進む世の中であるからこそ、本を読むことの意義を見つける場として、書評コンテストの発展をお祈りしています。





2023年2月3日 表彰式

(左から宮田さん、中野さん、田邊さん、小野寺さん、飯山さん)

2023年3月発行

編集・発行 明治大学図書館



**明治大学図書館**  
**MEIJI UNIVERSITY LIBRARY**



〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1  
TEL:03-3296-4254  
URL:<https://www.meiji.ac.jp/library/index.html>

